

マラソンの父 ^{かなぐりしろう} 金栗四三の物語

～マラソン世界最低記録「54年8ヶ月6日5時間32分20秒3」

金栗四三は日本における「マラソンの父」と呼ばれる。今や正月の風物詩、国民的行事とも言われるあの箱根駅伝の創始者でもあります。1894年（明治24）年に生まれた彼は、1912年の第5回ストックホルムオリンピック出場を賭けたマラソンの国内予選会で、当時の世界記録を27分も縮める大記録を出し、短距離の三島弥彦とともに日本人初のオリンピック選手となっている。

日本国民の期待を一身に背負った彼であるが、オリンピック本番ではレース途中に日射病で意識を失って倒れ、近くの農家で介抱される。その農家で目を覚ましたのは、すでに競技も終わった翌日の朝であった。この日の気温は40度という記録的な暑さで参加者68名中およそ半分が途中棄権し、1名は倒れた上、翌日亡くなったと言われている。金栗にはさらに悪条件が重なった。当時、日本からスウェーデンへ20日もかけての船と列車の長旅。さらに、スウェーデンの白夜（高緯度にあるために、夏には太陽が沈まず夜も明るい現象）のために、睡眠にも支障があった。食事もあわなかったと言う。しかも、マラソン当日は金栗を迎えに来るはずの車が来ず、競技場まで走っていかなければならなかったのだ。

その雪辱に燃える金栗ではあったが、年齢的にも競技者としてピークを迎える4年後のオリンピックは第一次世界大戦のために出場を果たすことができず、その後にもオリンピックに2度出場しているが、思うような結果は残せていない。

時は流れて1967年（昭和42年）3月。当時75歳になっていた金栗はスウェーデンのオリンピック委員会から、ストックホルムオリンピック開催55周年を記念する式典に招待される。実はストックホルムオリンピックでは棄権の意思がオリンピック委員会に伝わっておらず「競技中に失踪し行方不明」として扱われていた。記念式典の開催に当たって当時の記録を調べていたオリンピック委員会がこれに気づき、金栗を記念式典でゴールさせることにしたのである。招待を受けた金栗はストックホルムへ赴き、競技役員が見守る中競技場内に用意されたゴールテープを切ったのである。

翌日のストックホルムの新聞にはこう書かれていたという。

『日本の金栗四三、ゴールイン。記録、54年8ヶ月5時間32分20秒3。これをもって、第5回オリンピック、ストックホルム大会の全日程は終了した。』

